九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

学社連携における学習者と支援者の学びの往還に関する一考察 ： ナラティブの視点から

江崎, 文寿
九州大学大学院人間環境学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/6757898

出版情報：社会教育研究紀要. 4, pp.19-27, 2022-05-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

社会教育研究紀要 第４号　2022 19-27

研究ノート

学社連携における学習者と支援者の学びの往還に関する一考察

―ナラティブの視点から―

A Study on The Circulatory Learning between Students and Educators in Collaboration by School Education and Social Education

― Focusing on Narrative ―

江　崎　文　寿※
Esaki Bunju

１．研究課題と視点

(1) 本稿の目的

本稿の目的は、学社連携における学習者と支援者の学びの往還についての具体的事例を、ナラティブの視点から検証することにある。ここでいう学習者と支援者の学びの往還とは、中学生の学びの場に、高校生や大学生が支援者として参加し、進路選択にあたってくぐってきた悩みや志についての語りを介して生まれた学びあいを指す。その学びあいを、各々の主体がその場への意味付けや自己への認識をさらに深める点に注目して検証していきたい。また、そこから学社連携における新たな関係性も見出していきたい。

この新たな関係性をひらくためのアプローチの必要性は、次のような今日的な状況にある。情報化やグローバル化が急速に進み、COVID19の影響による学校や家庭、地域の教育力のあり方が一層変化している。これに対して、これまでの学校と地域の連携協働の取り組みをさらに充実させることが求められている。

学校と地域の連携、協働の取り組みについては、文部科学省中央教育審議会でもこれまでの成果を挙げつつ、コーディネート機能が特定の個人に依存している課題やカリキュラム編成や運営上の教職員の負担などの課題が指摘されている[1)]。その背景には、これまでの１つの学校とその校区の地域というとらえや従来の取り組みといった「枠」のなかで教職員も地域のメンバーもなかなか展望がみえないことで、企画運営の負担が大きくなり、硬直化していると考えられる。そのうえ、平成29、30、31年度改訂教育指導要領が2020 R2年度から年度ごとに小学校から中学、高校で実施され、学校と地域の協働によるあらゆる世代が一体となった地域活性化を文部科学省はさらに求めている[2)]。

そのような硬直化する状況を打破する糸口としても、連携協働の仕組みや連携協働する対象やこれまでの取り組みのイメージにとらわれない新たな関係性をひらくためのアプローチが求められている。

(2) 視点―関係性をひらく―

本論は新たな関係性をひらくアプローチを検証するための視点として、「ナラティブ」に着目する。

ナラティブ研究（narrative inquity）は心理学、教育学、社会学、医療・看護学などさまざまな人文・社

※九州大学大学院人間環境学府修士課程／大牟田市保健福祉部　相談支援包括化推進員

会諸科学の研究領域における質的研究法として注目を集めている。口述されたもの（語られたもの）、書かれたもの、ヴィジュアル表現されたものと、形式を問わず、ナラティブへの関心は高まっている[3)]。

社会教育においてもさまざまな学習活動を通じて豊富な語りが蓄積されている。その中でも書く実践として、生活綴方、生活記録運動、自分史等の実践は、身の回りのこと、自分のこと、家族のこと等の物語が書かれ、これらには書き手や読み手に対して自分の作り替え、経験の共有化、認識の転換などさまざまな自己教育の意義があったといえる[4)]。また、識字教育のなかで自分史学習を対象にナラティブアプローチから「識字の実践でありながら、書くことに固執しない識字学習の構築に向けての一つの方向性」が検討された研究もある[5)]。

多様に存在するナラティブ研究を保坂（2014）は、その特徴から（１）「ナラティヴについて（on narrative）」の探求、（２）「ナラティヴで（with narrative）」の探求、（３）「ナラティヴを介して（through narrative）」の探求の３つに分類し、分析の視点を分類している[6)]。（１）と（２）は、語り手が語るナラティブのテクスト及びコンテクストそのものに焦点があてられる。それに対して、（３）では、語り手と聞き手双方の働きかけによって協働的に意味生成が行われ、対話の中に位置付けられたナラティヴに焦点をあてる。（３）の視点を踏まえた嶋津（2018）は、日本語教員養成におけるナラティブ活動の考察をとおして、語りが構築されていく相互行為、語りを通して進化されていく対話等が、社会的実践としても機能していることに「語ること」の意味と意義を見出している[7)]。

本論もこの対話に位置付けられたナラティブの視点をとおして、高校生大学生の語りが中学生の学びを深め、中学生の学びに触れた高校生大学生の学びが深まるという、語りを通して進化していく対話を考察したいと考える。ここに硬直化した状況を打破する糸口を見出したい。また本論では、そのような対話を地域と学校の連携システムに位置づけるために、１つの学校とその校区というヨコの連携の枠組みや対象、校種間のタテの連携について、これまでの取り組みの枠やイメージにとらわれず、それぞれの主体にとって有用な関係への工夫についても注目する。

２．高校生大学生の語りを位置づける工夫を生み出した行政の福祉分野から教育分野へのアプローチ

(1) 大牟田市における高齢者福祉施策の展開

ここで検証したい事例は、厚生労働省の「介護の仕事魅力発信」事業を活用した取り組みである。この事業を大牟田市が受託したのは、次のような経過がある。大牟田市は、熊本県と県境を接し福岡県の最南部に位置する。かつて三池炭鉱を中心に石炭化学コンビナートが発展したが、エネルギー政策の転換により1997年に閉山を迎え、人口減少と高齢化が進行している。人口はおよそ11万人で、高齢化率は37.1／1000人（2021/4/1現在）と全国の20年先を進んでいるといわれる。

一方で、地域と医療、介護、保健、福祉が連携した総合的な高齢者施策は、全国からも先進地として注目されている[8)]。本市では官民協働により「認知症になっても安心して暮らせるまちづくり」を目指し2002年度から「大牟田市認知症ケアコミュニティ推進事業」を展開している。この事業が地域との協働・参加の下地となっている。具体的には、認知症コーディネーター養成研修（人材育成）、もの忘れ予防相談検診（早期発見）小中学校の絵本教室（理解啓発）、ほっとあんしんネットワーク模擬訓練（地域づくり）の 4 つの事業を柱に全市的に取り組んでいる。これらの取り組みは、教育分野とも密接に連携している。小中学校の絵本教室に認知症コーディネーター養成研修を終了したメンバーが多数参加しての少人数でのグループワークを展開したり、絵本教室で学習した小中学生が模擬訓練に参加したりするなど、福祉と教育が協働して取り組んできた経過が、今回「介護のしごと魅力発信事業」の委託につながっている。

(2)「介護のしごと魅力発信」事業の概要と展開

厚生労働省は、近年の介護関係仕事の人材不足等の状況に対する施策として、平成30年度から「介護職のイメージ刷新等による人材確保対策強化事業」をひきつぎ、平成元年度から「介護のしごと魅力発信等事業」という形で事業を公募している。その目的は、福祉・介護のしごとの魅力を伝え、福祉・介護に対して抱いているイメージを向上させるための「体験型・参加型イベント」の開催や「世代横断的な広報活動」の展開、「若年層、子育てを終えた層、アクティブシニア層、介護事業者に対するターゲット別のアプローチ」を実施し、福祉・介護分野への多様な人材の参入促進である。

大牟田市は、これまでの取り組みを踏まえ、2021年に全国８か所で実施されるモデル事業の１つに指定され、大牟田市、大牟田市教育委員会、大牟田市サービス事業所協議会がその委託を受け、若者層、特に小中学生に向けて、魅力向上に取り組むことになる。

市内の小中学校に総合的な学習の時間の取り組みを協働で企画し取り組む呼びかけをしたところ中学校５校から手があがった。４校は中学１年生の福祉学習の取り組みとして、１校は２年生のキャリア学習の取り組みとして取り組むことになった。その窓口として大牟田市福祉課のスタッフが担当をした。各学校の担当者と協議を重ね、その学校の積み上げや思いを大事にしながらそれぞれの学校の企画を練り上げていった。

この事業委託を活用した連携協働の工夫として、コーディネーターの位置づけと役割がポイントになる。前述の教育と福祉の協働の取り組みにも関わってきた退職教員が市福祉課のポジションにつき、この事業の窓口に位置づいたところがある。そのスタッフが、福祉の側からアプローチする際にわかりにくい学校側のシステムや取り組みの組み立て等について、学校側のやり方と重ねやすい仕様にして提案することで学校側も受け入れやすくなった。また、校区という枠を越え、市内の中学校へ働きかけ、プログラムを複数の中学校で実施することが可能になった。もう一つ、取り組みを進めるうえで、元教員が提案することでの安心感も学校側にあったであろうことが想像できる。言い換えれば、そこのようなところも連携協働する際のハードルになっていたともいえる。

今回の取り組みで特徴的なことのひとつは、福祉側からの働きかけで中、高、大学という校種を越えて取り組むところにある。これまでタテの関係において中学と大学を結びつけるイメージはなかなか持ちにくかった。それは、中留の指摘[9)]にもあるように、タテの関係における校種間連携のポイントは、系統性、発展性（カリキュラムや授業、研修を介しての連携）と運用上の弾力化（入試受験資格の弾力化）という２種類の「連携」の特色（原理）がある。しかし、連携協働を働きかける中学校や地域の担当者が学校とその校区というこれまでの枠のなかで考えた場合、上記のような特色（原理）を越えて、中学校と大学を結び付けるイメージは広がりにくい。

また、昨今、大学進学率が50％を超える状況がある。しかし、この状況は裏を返せば、半数近くは大学に行かない状況にあるといえる。もちろん、選択肢としては、高校を出て就職することもありえるが、近隣に大学がなかったり、近くに大学生がいなかったりするなかで大学生というイメージや大学という選択肢を知らないケースが中学校や高校の現場では多々ある。

大牟田市における高校生の大学進学率は、2015 H27年は38.5％（全国54.5％）、2018 H30年は40.9％（全国54.7％）と大きな開きがある[10)]。その背景には、大牟田市の近郊には、2005年に開校した帝京大学福岡キャンパスのみであり、中学生や高校生にとって、身近に大学や大学生がいないことも影響していると思われる。

今回は、大学生が登場することによって、中学生にとっても大学という進路の選択肢を知ること、大学という学びの場を知ること、そこで学ぶ大学生という具体的なイメージを持つことができるところも、学びの広がりや深まりにつながるといえる。

今回は、「介護のしごと魅力発信」という切り口や福祉課が大学の実習やインターンシップの受け入れ先として関係性があったことから連携協働する対象としてお互いに働きかける可能性が広がった。取り組み内容については、まず、高校生や大学生が資格取得をめざして取り組んでいる福祉や医療分野の内容その資格を活かした仕事について、中学生にわかりやすく話してもらうことである。

もう一つは、高校生や大学生に自分がその進路を選んだ理由を語ってもらうことである。それは、担当者の経験の中で、中学生が持つ進路選択のイメージの幅が狭いので、悩みながら高校や大学、就職してからもそれぞれ悩みながら進路を選択する多様性を中学生に近い年代の高校生、大学生から伝えてもらいたいと考えたからである。中学時代にどんなことを悩みながら、どんな理由でその進路を選んだのか、中学生にとってより年齢の近い高校生、大学生の語りは、自分の将来について、まだ十分なイメージを持ち得ていない中学生にとっては、まさにロールモデルとして最適であった。

この工夫により、高校生、大学生の語りを中学生の学びの場に位置づけ、資格取得を通してその仕事をめざす高校生、大学生が中学や高校時代の進路選択の悩みなどを年齢の近い立場で語り、その一人ひとりの違いから、中学生の多様なロールモデルとの出会いが実現できた（表１）。

表１　各中学校の取り組み一覧　＊コロナ禍の対策は注を参照[11)]

校名	テーマ	取り組みの具体
A 中学校	２年生キャリア学習	事前学習（福祉課、産業振興課）→高校大学生の話（４校５コース） →事業所の方の話（７事業所）
B 中学校	１年生福祉学習	事前学習（福祉課）→高校大学生の話（４校５コース）
C 中学校	１年生福祉学習	事前学習（福祉課）→当事者の話（認知症、外国籍、妊婦の方） →　高校大学生の話（５校６コース）
D 中学校	１年生福祉学習	事前学習（社宅暮らしの経験のある方） →当事者の方の話（その地域に住む方の炭鉱との暮らし）
E 中学校	１年生福祉学習	事前学習（介護施設で過ごす方）→オンライン：贈りもの交換会（中学生⇔高齢者）

高校や大学と打ち合わせを重ねていく中で、実は、高校や大学にとってもコロナ禍でインターンや実習の機会がなくなり、人前で話をしたり活動をしたりすることができていないという課題を抱えていることがわかった。そのため、今回の中学校での活動の機会は、高校生や大学生にとっても、高校や大学の教職員にとっても、少しでも経験を積む機会として有効活用できるように複数の中学校での登場場面を設定した。そのことは有用であり、高校、大学側とも協力的ななかで取り組みを展開することができた。この点にも中学校と高校、大学の双方にとって重なるメリットがあった。

３．新しい関係性をひらくためのアプローチとしてのナラティブ

(1) 中学生と高校、大学生が出会う場づくりの工夫

まず、キャリア学習と福祉学習をテーマに取り組んだ中学校の「総合的な学習の時間」のなかで、高校生、大学生の語りの概要は以下のようなものであった。

キャリア学習をテーマに取り組んだA中学校では、２日間の日程で、１日目１～４時間目を使い、６か所の教室に誠修高校保育科、有明高校看護科と福祉科、三池工業高校、九州看護福祉大学のメンバーが分かれ、中学生が15人程度で話等を30分ごとに回った。大学生の話は、大学の場所や施設紹介、５つの学科の概要と社会福祉学科の特徴、取得をめざしている資格と仕事、大学生活で授業や行事、長期休み等の大

学生活などを５人の学生たちが役割分担しながら、中学生にもわかりやすく説明をしてくれた。

福祉学習をテーマに取り組んだＣ中では、２日間の日程で１日目に若年性認知症の方、外国籍の方、妊婦さんの当事者を１～４時間目を使い、60分の３コマで話を聞いた。２日目には、１時間目に誠修高校保育科、有明高校看護科と福祉科、久留米大学社会福祉学科、九州看護福祉大学、帝京大学福岡キャンパスのメンバーが７分ずつオリエンテーションの話を１年生全員で聞いた。２～３時間目は、５～６人の班ごとで興味を持ったところを２か所選び、40分 × ２コマで詳しく聞く形をとった。

高校生、大学生の話も大枠は前述の流れと重なるが、時間が長くなったところをクイズやミニ体験などを組み込んで工夫していた。オリエンテーションの話では、高校生や大学生も他校のプレゼンが気になったらしく、いろいろな刺激を互いに受けていたのは印象的であった。

(2) 高校生や大学生との出会いと語りが生み出す中学生にとってのロールモデル

今回の取り組みで注目したのは、高校生や大学生という自分たちと近い年齢の人とのかかわりの中での中学生の語りである。そのような近い関係での学びが生み出す効果は大きいと考える。

（※以下の＿＿＿＿は、報告者が挿入）

- いろんなお話を聞いて福祉に対して興味を持つことができました。福祉のことをもっと知りたいと心から思いました。福祉や介護施設のイベントがあったら、是非参加してみたいです。大学や高校って大変だけどとても楽しそうだし、イメージが変わりました。
- しっかり皆さん目標や夢があって、看護というこれからへの意味がある行動ができているのはすごいと思いました。また、皆さんに「夢は？」ときかれてパティシエかカウンセラーといえました。そしたら、皆さんしっかり納得して頂いて本当にうれしかったです。数分の中でも楽しく話せてもっとしゃべりたい！と思うくらい楽しく学べました

今回本論は、高校生や大学生の生き方や学ぶことと向き合っている姿などに対して「すごい」とか「かっこいい」と感じる気持ちに特に注目した。茂木（2021）は、ロールモデルについて「個人のアイデンティティは相互関係から構築される部分が大きく直接的に接触のある関係性はロールモデルの効用に重要である」とする[12)]。

ここで、中学生にとって年齢の近い存在である高校生や大学生の「かっこいい」姿や語りは、自分がめざしたいものを後押ししたり、気づいていなかったことを気付かせ、気づいたことへのプラスイメージを持たせたりしてくれる。まさに中学生にとって高校生や大学生が、自分にとってのロールモデルになることができたように思う。

- 今日、話をしてもらった方たちはずっと笑顔で、おもしろくて、本当にすごかったです。私は将来の夢がまだ決まってないけれどみなさんのようなステキな大人になりたいです。
- 大学生の方々の話を聞いて、福祉は社会のさまざまなところで役に立っていて、とてもかっこいい仕事だなと思いました。
- この大学には５つの学科があることがわかりました。それぞれどうして人を助けるような職業になりたいのかと尋ねると全員「人に助けられたことがあったから」といっていました。一人ひとりの患者さんへの思いがすごく伝わり、かっこいいなと思いました。
- 私は福祉が自分から遠い存在だと思っていましたが、自分にとても近い存在だと聞いてびっくりしました。そして、すごくかっこいい仕事だなって思いました。

さらに、その関係の中での学びのなかでロールモデルがみえてきたとき、自分の進路についてもしっかりと向き合って切り拓いていこうとすることにつながっていた。

- 私も小学校６年生のときの先生がすごく優しくてその先生のような人になりたいと思っていたけど、勉強があまりできないし、と思っていました。しかし今日の発表などをみて、ちょっとやってみようかなと思いました。私は少し進路が見えてきた気がします。
- 子どもの手助けをしたいなどで高校進学を決めたのがすごいと思いました。私も小学校の時から看護師を目指していたけどスマホでしらべたときに自分のへんさ値がひくくて、あきらめようと思っていたけど、高校生の人たちみたいに努力しようと思いました。人のために助けたりすることはとても良い仕事だと思うので、看護師か福祉士をめざしてがんばりたいと思います。

中学生にとって、年齢の近い高校生や大学生の語りは、それまでただの高校生や大学生だったのが、「あこがれ」をもつ身近な関係に感じることで「こんな思いをもって勉強している」「こんな仕事を目指している」顔の見えるひとになり自分の中にある意欲をかきたたせてくれる。そのことは、中学生が生きていく主体になる一つのきっかけを生む。

今回の取り組みは、大学生が登場することによって、中学生にとっても大学という進路の選択肢を知ること、特に大学という学びの場を知ること、そこで学ぶ大学生という具体的なイメージを持つことができるところは、今までにない学びの広がりや深まりにつながるといえる。

- 九州看護福祉大学のみなさんへ、今日は僕たちのために学校のすばらしさを教えていただきほんとうにありがとうございます。不思議に思ったのが、看護福祉なのに、口腔保健学科もやっていたの？と思いました。そして、すごい大学だなーと思って話を聞いていました。僕は高校を卒業したら就職を考えていましたが、こういった機会で話を聞いて人生の道が進化してきていると思います。

- 今日はお忙しい中、大学について詳しく教えてくださりありがとうございました。社会福祉士や介護福祉士をめざした理由、大学進学の理由などを聞いてこれからゆっくりやりたいことを見つけていこうという気持ちになれました。他にも大学の話などを聞いてまだ中学生ではあるけど少し大学のイメージも沸いたし、九州看護福祉大について少し知ることができたので良かったです。
- 大学での話を聞いて、高校と同じなのかなって思っていたけど、１日のスケジュールが全然違くて、授業１時間90分はやばいですね。始まる時間はほとんど同じでも、終わる時間が18：00だったりするから、やっぱりきついなって思いました。けど、本気でとろうとしている人たちを見るとこっちまで頑張ろうと思いました。

(3) 中学生の学びを通して、さらに深まる高校生、大学生の学び―相互作用のナラティブ―

こうした取り組みについては、これまで学校、地域の連携の中で、学校（この場合中学生）の学びを中心に整理される場合が多い。

しかし、ここでは、高校生や大学生にも多くの気づきや学びが起こっている。つまり、高校生、大学生の語りによって得た中学生の気づきや学びを通して、さらに高校生や大学生がさまざまな気づきや学びを得て、その深まりが彼らの語り（振り返り）から読み取れる。取り組みのあとに振り返った感想を書いてくれた文章から注目されるところを抜き出した。（※以下の＿＿＿は、報告者が挿入）

- この経験からなぜ自分がPTを目指したのか思い出すことができたので目標の再確認ができてよかった。PTの仕事も再確認できる機会ができてよかった。同じ大学でも他の学科についてそこまで理解していなかったので楽しかった。
- 今回の取り組みをとおして技術を教える場合は改めて手順や根拠を深く学べることができました。教える側の経験もできてよかったです。学校の説明をする際はなぜ看護師になろうとしたのか、なぜ有明高校を選んだのかなど、初心に戻ることができました。

- 白光中では体験をするのが中心で、私は包帯をしました。今までは話をするのが中心で自分が経験してきたことなどの質問を受けていましたが、看護の技術や知識のことについての質問が多く、そのとき答えることができない質問があり、とても悔しかったです。だから、何を聞かれても答えることができるようにこれからもっと頑張ろうと思いました。この経験を通してこれからの目標ができました。

ここでは、話す側にとっても話す内容にかかわる見直しだけでなく、自分自身の初心や目指している目標を確かめることに繋がっている。また、話す側自身が自分の弱さや課題を克服するところも見受けられ、そのことが自分の達成感や成長を感じる機会にもなっている。

- 今回の取り組みを経験して、私はコミュニケーションをとることの大切さを改めて気づくことができました。またコミュニケーションを取るだけではなく、自分も相手も笑顔になることが大切だと感じました。自分がやったことのない経験をその場で体験してみて、それができたとき笑顔になるように、苦笑いなどではなく、自然な笑顔が必要だと考えました。
- 私はこういう機会をいただくまで、人前で話すことや伝えることが好きということに気づきませんでした。自分の特技や自信をつけられてよかったと感じています。今回は、中学生のみなさんに体験をさせたり、いっぱい楽しんでもらうということを考えました。その考えあってか、中学生のみなさんが帰るときは笑顔で帰ってくれてとてもうれしかったです。伝える力やコミュニケーション能力を高めることができたと思います。
- 人の前で話すことが苦手でなるべく避けてきましたが、今回の取り組みに参加させていただいたことで少し克服され、楽しさも味わうことができました。話をしっかり聞いてくれて手遊びにも参加してくれたことがとてもうれしかったです。

さらに、今回の取り組みでは、コロナ禍で出来なかったところを補う機会にもなったことは、高校生や大学生にもメリットがあるという話も聞けた。

- わたしも中学生にお話しするという体験が初めてでした。生徒にどのように伝えたらわかりやすいのか、興味を持って面白く聞いてもらうためにどうしたらいいのか、と試行錯誤する中で社会福祉の考え方や魅力を再発見することができました。またプレゼンについてもグループメンバーと話し合いを重ねて、より良いものを作ろうと共通した目的を持って臨むことができました。４年のこの時期は同級生にもなかなか会えない状況だったのでこのような雰囲気は久しぶりで楽しかったです。

中学校の教師にとっても従来から取り組んでいた職場体験学習がコロナ禍の中で出来なかったことを逆手にとらえ、福祉分野のスタッフと一緒にこれまでとは違う新しいやり方に取り組むことができたことは、これからの総合的な学習の時間の新たな取り組みに広がる学びでもあったという声は、大人の学びにもつながったと思う。

- コロナ禍で職場体験が難しいなか地域にスポットをあてたキャリア学習ができてよかったです。生徒たちが教員の知識だけでは教授できないものを吸収する姿に、新しい総合学習のあり方を学ぶことができました。（中学校教師）
- 高校や大学、自治体、医療や福祉、流通や物販など多岐にわたる方々の話を直接伺うことができ、よい刺激になったと思います。仕事内容にとどまらず、就職までの経緯なども触れてもらい、将来を考える貴重な学習となりました。（中学校教師）

これらのことから、高校生、大学生の語りによって得た中学生の気づきや学びを通して、さらに高校生や大学生がさまざまな気づきや学びを得て、その深まりが彼らの語り（振り返り）から読み取れる。

語り手と聞き手双方の働きかけによって、協働的に語りが構築され、お互いの学びが進化していく対話が行われているところに、新たな関係性を開くアプローチとしてのナラティブの視点の意義を見出すことができる。

４．新たな関係性をひらくナラティブの視点の今日的な意義

本稿の目的は、学社連携における学習者と支援者の学びの往還についての具体的な事例をナラティブの視点から検証することにある。ここでは、高校生や大学生が進路選択にあたってくぐってきた悩みや志についての語りを通して、中学生が学び、その学びを通して、さらに高校生、大学生が自分自身の認識をさらに深めるところを、ナラティブの視点から検証しようとした。中学生が大学生と出会うことは、中学生にとって進路の選択肢としての大学という場の存在やそこで学ぶ大学生の姿が将来展望につながるといえる。中学生が将来の仕事だけでなく、高校、大学生の学んでいる姿にあこがれ、自分の今の勉強への姿勢を問い直したことは、露口（2021）が指摘するように「ロールモデルは、特定の役割における行動の見本を示すだけでなく、行動や意思決定に対して様々な影響を与える人物」[13] として、中学生にとって彼らの存在が影響を与えていたといえる。特に、前述したように大学進学率が他の地域よりも低い大牟田市の学校現場において、このような取り組みを取り入れていく必要性は大きい。

さらに、中学生の学びを通して、高校生や大学生にとっても自らの学びの見直しだけでなく、自分自身の初心や目指している目標を確かめることにつながっていた。また、語る側自身が自分の弱さや課題を克服するところも見受けられ、そのことが自分の達成感や成長を感じる機会にもなった。つまり、語り手の中のできごとが改めて意味づけられたり、新たな課題が見つかったりするなど、彼らの生き方につながるところにも学びの往還が生み出されている。

また、その高校生や大学生たちの姿を感じた、高校や大学の教職員にとっても、このような取り組みについての手ごたえを実感し、今後の取り組みの積み重ねを期待する声としてもあがっている。そのことは、中学生や高校、大学生に関わる大人同士の互いの信頼にもつながると考える。このように高校生、大学生の語りを位置づけた取り組みが、硬直化した学校と地域の連携協働のあり方を打破する新たな関係性をひらくアプローチのひとつであると読み解きたい。

本稿で用いた「対話に位置付けられたナラティブの視点」は、保坂（2014）が述べている「ナラティブを個人の内面の開示や告白として分析するのではなく、語り手が聞き手との相互関係のなかで、ある出来事を理解可能であるように意味づける、あるいは意味づけ合うプロセス」であり、「このプロセスを通じて、互いのアイデンティティが描き出され」ることである[14]。

今回の実践をこのような視点でみたとき、高校生大学生が語り手として、聞き手としての中学生との相互関係の中で過去の出来事やこれまでの経験をそれぞれが振り返り、出来事と出来事、経験と経験をつなぎ、それぞれのアイデンティティを構築していくという意義が明らかになる。その意義は、硬直化した学校と地域の連携協働のあり方を打破し、さらに進化させる可能性につながると考える。

今回は研究ノートの形であるが、先行研究の整理や意義付けについては、さらに研究論文として整理していきたい。

【注】

1）文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会学校地域協働部会地域とともにある学校の在り方に関する作業部会「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について　審議のまとめ」（平成27年12月）において、これまでのコミュニティスクールやこれまでの地域における学校との連携・協働の取り組みの成果と課題を次のように整理している。成果としては、保護者や地域住民が学校支援活動に関わることで、学校の教育水準の向上に効果があり、地域の教育力の向上や地域の活性化などをあげている。一方、課題としては、活動がそれぞれ個別に行われており連携が十分でないことやコーディネート機能の大部分を特定の個人に依存し、結果として、持続可能な体制がつくられていない場合が多いこと等をあげている。

2）その中では、各教科や教科外活動すべてにわたる共通の基本方針として「社会にひらかれた教育課程」が挙げられ、学校教育において養成される資質・能力が学校という枠を超えて「社会」と共有されるべきものとして明確に位置付けられた。それを具体化するために「カリキュラムマネジメント」があり、「教科等を学ぶ意義」として個別の教科だけでなく、教科間のつながりを求められている。つまり、各教科、教科外活動のカリキュラムを「社会」と共有されるべきものとして組みなおす作業が求められている。

3）保坂裕子「ナラティヴ研究の可能性を探るための一考察―＜Who-are-you?＞への応えとしての＜わたし＞の物語り―」『兵庫県立大学環境人間学部　研究報告』第16号 2014年 pp.1-10.

4）川原健太郎「ナラティブの視点からみた書く実践に関する一考察」『日本学習社会学会年報』第12号 2015年 pp.99-106.

5）添田祥史「識字教育方法としての自分史学習に関する研究―ナラテイヴ・アプローチからのモデル構築の試み―」『日本社会教育学会紀要』第44巻 2008年 pp.41-50.

6）前掲保坂論文。この中では、「ナラティブ」ではなく、「ナラティヴ」と表記されているため、該当論文を引用する場合は、「ナラティヴ」とする。

7）嶋津百代「日本語教育・教師教育において「語ること」の意味と意義―対話にナラティブの可能性を求めて―」『言語文化教育研究』第16巻 2018年 pp.55-62.

8）『認知症施策における官民連携の好事例に関する調査研究事業報告書』日本総合研究所 2019年 pp.49-53. 認知症高ディーネーターの養成は、令和元年度で17期を迎え、修了者は累計で145人になる。絵本教室は毎年半数を超える小中学校が実施している。また17回を迎えるほっと安心ネットワーク模擬訓練は、コロナ前には、市内19校区で3000人近くの市民が参加している。

9）中留武昭「学校と学校外の教育をめぐる関係性の吟味―開かれた連携と協働に焦点をあてて―」『教育法制学研究』1999巻６号 1999年 pp.15-16.

10）大牟田市統計年鑑、学校基本調査。

11）今回の取り組みにあたってはコロナ感染対策が求められており、従来のやり方では実施できなかったところを乗り越えるための工夫もした。具体的には、高校や大学、事業所から少人数で中学校に来校してもらうこと、受け入れる中学校でも空き教室や特別教室を活用して、受講する生徒の人数を減らすことなどである。事前学習や当事者からの話の場面では、体育館などの広いスペースに１学年だけ入り、間隔を広げて座る形で話を聞いた。高校、大学生の話の場面では、それぞれの高校や大学、事業所が教室や特別教室等、６つのブースに分かれて、少人数のグループに分かれた中学生が時間を区切って、そのブースを回って話を聞く形で工夫した。また、来校が難しい学校や事業所は、Zoom を使ったオンラインで参加してもらった。そのような工夫も今後の実施方法の一つとすることができた。

12）茂木洋平「ロールモデルの理論 Affirmative Action（1）」『桐蔭論叢』44号 2021年 p.8.

13）露口侑「キャリア形成支援におけるロールモデルの機能と関係性」『京都大学大学院教育研究科紀要』第67号 2021年 p.377.

14）保坂裕子　前掲論文　p.7.